

Pudd'nhead Wilson における悪

— 作家と現実 —

有 川 昭 二

I

作家の良心とか時代的関心とか、或いは社会的責任とか、作家がいわゆる「現実」とどのような係わり合いを持っているか、或いは持つべきであるかという問題がある。たとえば人種問題、黒人問題、人種差別の問題である。問題の根は意外に広く、深いのであって、この人種問題、**racial problem** という言葉一つを取りあげてみても、果してどの程度に日本人である我々がアメリカ人の使うそれを、その強さにおいて理解しているかという「問題」が先ずある。アメリカの「現実」において、**racial problem** という言葉がどこで必要であり、どこで必要でないか、その機微が分からないのだ。或いはとんでもない誤解もあり得る。

一方、作家は勿論政治家ではないし、社会改良家でも、革命家でもない。「現実」に首をつっこんで、そこから一步も外に出られないでは、勿論作家ではない。又作家が提供する現実的な問題が、はたしてどの程度に「現実」の問題の解決に役立つかも疑問である。人種問題はアメリカの命とりにもなりかねないといわれるほどの大問題であり、「現実」の首根っこを押えているかに見える政治ですら、青息吐息の現状である。作家に何が出来るのか。

Mark Twainは黒人作家ではない。その Mark Twain が奴隷制度という「現実」の問題をとりあげても、そこに限界があり、物足りない点があるのも当然であろう。いや、Mark Twain は、作家として、奴隷制度が含み持つ人間世界の現実—精神の現実—を問題にしたのである。Mark Twain は Huckleberry Finn (1885) で Nigger Jim を創造し、A Connecticut Yankee (1889) で奴隷制度を批判した。しかし Jim は少年 Huck のわき役であり、Hank Morgan には King Arthur's Court という制約がついていた。Mark Twain は Pudd'nhead Wilson (1894) ではじめて、その現実、奴隷制度がもたらす精神の現実と真正面から取りくみ、それを十分に、且つ端的に表現した。

II

この物語はミシシッピ河を St. Louis から少し下った、ミズリ州側にある河畔の町、Dawson's Landing を舞台としている。物語は1830年に始まり、1人の人間が生れ、育ち、大人になる期間、1853年頃まで続くが、いずれにしろ南北戦争以前の話である。

Dawson's Landing は50年前にミシシッピ河の小さな船着場として開け、ごく僅かながら成長を続けている町であるが、南部の町としての性格は既に明らかである。家柄—F.F.V. (the First Families of Virginia) —が重んじられ、ヨーロッパの「貴族」が珍重され、gentleman としての名誉を賭けた血闘がもてはやされる。steam boating も色濃くその影を落している。勿論 slaveholding town であり、奴隷たちはお互いに恵まれない者同志助け合うという気風は持ちながら、白人に対しては大体次のような状態である。

On frosty nights the humane negro prowler would warm the end of a plank and put it up under the cold claws of chickens roosting in a tree; a drowsy hen would step onto the comfortable board, softly clucking her gratitude, and the prowler would dump her into his bag, and later into his stomach, perfectly sure that in taking this trifle from the man who daily robbed him of an inestimable treasure—his liberty—he was not committing any sin that God would remember against him in the Last Great Day. 1)

又、この the Last Great Day より更に恐ろしい、この世の地獄として、down the river がある。そこに売られることは、奴隷にとっては死よりも恐ろしいことなのである。

物語はこの Dawson's Landing の F.F.V. の第一人者である Driscoll 家に関するものである。一家の主人、York Leicester Driscoll は40才位で、郡裁判所の判事であり、公平、実直、寛大な gentleman である。しかし Mark Twain 自身が説明しているように、この物語の主要な人物は Pudd'nhead Wilson, Roxana, Tom Driscoll の三人である。ニューヨーク州出身で、スコットランド系の血をひいた Wilson は、25才の時にこの町にやってきた弁護士である。町につくと早々に何気なくとばした駄じゃれのために、pudd'nhead (うすのろ) の仇名がついている。土地測量なども含めた Wilson の商売は、仇名がわざわざいってかあまりはやらず、その暇を Wilson は手相や指紋の研究につぶす。約20年の雌伏の後、この研究が幸いして、殺人事件の解決で一躍勇名をはせるのだが、この Wilson の役割は、他の二人の主要人物の役割とは本質的に違っている。勿論小説自体にこの人物の名前が冠してあり、この人物なしには物語は成り立たないわけであるが、その役割は事件の要所要所に立つそれであり、いわば物語の進展のかなめとして、外面的な役割しか果していないように思われる。Wilson の役割はいわばメロドラマのそれであり、Mark Twain が意図した "tragedy" —精神の悲劇— は、他の二人の人物 —Roxana と Tom Driscoll —によってこそ表わされているように思われる。

III

Roxana は $\frac{1}{16}$ だけ黒人の血のまじった、外見はどうみても白人と変らない奴隷女であ

る。その立派な容姿及び態度について

She was of majestic form and stature, her attitudes were imposing and statuesque, and her gestures and movements distinguished by a noble and stately grace. Her complexion was very fair, with the rosy glow of vigorous health in the cheeks, her face was full of character and expression, her eyes were brown and liquid, and she had a heavy suit of fine soft hair which was also brown, but the fact was not apparent because her head was bound about with a checkered handkerchief and the hair was concealed under it. Her face was shapely, intelligent, and comely—even beautiful. She had an easy, independent carriage—when she was among her own caste—and a high and “easy” way, withal; but of course she was meek and humble enough where white people were. 2)

Roxanaは20才の時私生児を生む。相手はれっきとした白人—それが Colonel Cecil Burleigh Essexという F.F.V. の町の名門であるのは物語の後半で明らかになる—であるから、その息子には $\frac{1}{32}$ —¹—₃₂—だけしか黒人の血はまじっていないことになるが、法律と慣習の擬制によって、やはり negro となり、奴隷となるべく運命づけられている。Roxanaが仕えている Percy Northumberland Driscoll は、Judge Driscoll の弟であり、土地の思わく買いで財をなしつつあるが、Roxana の息子と丁度同じ日に、この家にも同じ男の子が生れる。Roxana はお産のその日からもう立ち働かねばならなかったが、一週間もたたないうちに Mrs. Percy Driscoll が死ぬと、二人の赤ん坊が Roxana の手に委ねられることになる。Percy Driscoll は仕事にかまけて、子供のことは構わないので、育児は Roxana の思い通りになされる。二人の子供は瓜二つで、どちらも青い目をし、髪は亜麻色の巻き毛であった。

さて、Roxana が大変な事をやってのけたきっかけは、一寸した盗難事件であった。僅かの金額であったが、連続して起った盗難事件のために、Percy Driscoll は激怒し、奴隷たちを河下に (down the river) 売り飛ばしてしまうという。実際は Dawson's Landing 近辺に売ったわけだが、Roxana は直接関係はなかったものの、この down the river という言葉を聞いていて非常なショックをうけ、息子の身の上を案じて、夜も眠れない。

A profound terror had taken possession of her. Her child could grow up and be sold down the river! The thought crazed her with horror. If she dozed and lost herself for a moment, the next moment she was on her feet flying to her child's cradle to see if it was still there. Then she would gather it to her heart and pour out her love upon it in a frensy of kisses, moaning, cry-

ing, and saying, "Dey sha'n't, oh, dey sha'n't! —yo' po' mammy will kill you fust!" 3)

彼女の母性愛は目覚め、のしかかってくる社会的な矛盾に素手で立ち向かってゆく。愛児を殺す以外に方法があるだろうか。白人の子供にくらべて、自分の子供が一体何をしたというのだろうか。どうしてこのような不幸な目にあわねばならないのだろうか。結局彼女は子供を道連れにして河に飛び込み、死んでしまおうと決意する。最後の化粧をし、晴衣に着替える。そして息子にも晴衣をと思って、何気なく Driscoll の子供の衣服をまとい替える。彼女は自分の子供の可愛らしさに驚く。その時彼女の頭に天啓のようにひらめくものがあつた。彼女は瓜二つの自分の息子と主人の子供とを、衣服をとり替えることによってすり替えてしまったのである。

彼女は主人の子供のことを思って懊悩するが、自分の子供可愛さには勝てない。結局英国の宮廷で似たようなことがなされたのを思い出して、白人もしたのだから、これは罪ではないと気休めのように呟くが、それにしても窮余の策の彼女のこの手段は、一体悪なのだろうか。今、仮にこれを悪として、ここから始まる悪の drama, usurpation (嗣子の地位の横領) の展開の仕方が、悪の歴史としてのこの物語の本質をなすものだといえる。

IV

Roxanaの息子、Valet de ChambreはThomas à Becket Driscoll の名で、Driscoll 家の跡つぎとして育てられ、Percy Driscollの息子、Thomas à Becket DriscollはValet de Chambreとして、奴隸として育てられたが、誰一人その秘密を見破るものはなかった。Tomこと Valet de Chambre は最初から a bad baby であつた。癪癪もちで、我がままで、いいだしたらきかない性質であつた。Chambers こと Thomas Driscoll と比較すると

Tom got all the petting, Chambers got none. Tom got all the delicacies, Chambers got mush and milk, and clabber without sugar. In cosequence, Tom was a sickly child and Chambers wasn't. Tom was "fractious," as Roxy called it, and overbearing; Chambers was meek and docile. 4)

ところで、Tom が Tom になったのは勿論 Tom の責任ではない。Tom は自分の与り知らないところで Tom になったのだ。勿論 usurpation の事実は消えないにしても、悪の歴史をたどる上で先ずTom に求められるのは、Tom のこの性格上の悪であろう。Tom は徹底的に Chambers をいじめ、利己的な我がままの限りをつくす。その当り方は何か自分の破滅的な運命を予知し、それに怯えているかのようである。少年たちから手痛い弱点をつかれ、からかわれた Tom は

"Knock their heads off, Chambers! knock their heads off! What do you

stand there with your hands in your pockets for?"

Chambers expostulated, and said, "But, Marse Tom, dey's too many of 'em—dey's—"

"Do you hear me?"

"Please, Marse Tom, don't make me! Dey's so many of 'em dat—"

Tom sprang at him and drove his pocket-knife into him two or three times before the boys could snatch him away and give the wounded lad a chance to escape. He was considerably hurt, but not seriously. If the blade had been a little longer his career would have ended there. 5)

Tom は最初は Roxana にとって、darling と master と deity を兼ね具えたものであったが、だんだんと master だけの存在となり、Roxana は母親の高みから奴隷の深みへと転落する。複雑に揺れ動く Roxana の感情は、次の彼女の泣きによく表われている。

"He struck me, en I warn't no way to blame—struck me in de face, right before folks. En he's al'ays callin' me nigger-wench, en hussy, en all dem mean names, when I's doin' de very bes' I kin. Oh, Lord, I done so much for him—I lift' him away up to what he is—en dis is what I git for it." 6)

Roxana はいっそのこと秘密をぶちまけてしまおうかとも考えるが、余りにも強大になりすぎた Tom のために、どうすることも出来ない。かえって自分が down the river に売り飛ばされはしないかと恐れなければならない。もっとも時々 Tom が優しくしてくれて、嬉しく、誇らしくなることもあったが、それすら、自分の息子、nigger sonが白人たちの間で威張りちらして、確実に自分たち、niggers の恨をはらしてくれるだろうという暗い喜び、屈接した誇りであった。

1845年、Tom が15才の時、父の Percy Driscoll が死に、Tom は Chambers と共に、伯父の Judge Driscoll にひきとられる。伯父が Chambers もひきとったのは、Tomが父をそそのかして、down the river に Chambers を売り飛ばそうとしているのを聞いて、scandal として、止めさせた責任があったからである。Roxana は主人の遺言により自由の身になり、それまで憧れていた汽船の chambermaid となり、8年間河上の生活を送る。しかしリューマチのため腕がきかなくなり、それまでの貯えをあずけていた銀行もつぶれてしまったので、息子のいる Dawson's Landing に帰ってくる。Roxana はもう43才である。Yale帰りの Tom は酒と gambling の味を覚え、そのため養父から疎んじられ、表面はともかく、内心それをよい事にして、St. Louis に出て、遊び暮している。Tom の long-forgotten old nurse であり、po' ole mammy である自分に、月に一ドルでも恵んでくれたらと思って、Roxana はたまたま自宅に帰ってきた Tom を訪問する。しかし

すげなく拒絶される。すると

Roxy's head was down, in an attitude of humility. But now the fires of her old wrongs flamed up in her breast and began to burn fiercely. She raised her head slowly, till it was well up, and at the same time her great frame unconsciously assumed an erect and masterful attitude, with all the majesty and grace of her vanished youth in it. 7)

彼女の中で、彼女だけが知っているあの秘密、息子をusurperにした昔の悪が突然息を吹き返す。怒りに狂ったRoxanaはすべてを伯父の Judge Driscollに打ち明けるとTomにいう。ところがTomはそれを勘違いしてしまう。Percy Driscollに破産して死なれ、無一文になったTomは、今度は伯父の財産をねらっていた。それも一度は信用をなくして破棄された遺言書を、再度書き改めてもらってまだ三箇月しかたっていないかった。しかも又もやgamblingのために多額の借金を負っていて、Tomはこの事実をRoxanaに握られていると思ったのだ。Tomは伯父にだけは告げないでくれと、膝をついて懇願する。それを見下すRoxanaは

The heir of two centuries of unatoned insult and outrage looked down on him and seemed to drink in deep draughts of satisfaction. Then she said:

"Fine nice young white gen'l'man kneelin' down to a nigger wench! I's wanted to see dat jes once befo' I's called. Now, Gabr'el, blow de hawn, I's ready—Git up!" 8)

Roxanaはここで、いわば悪の上塗りをしていることになる。最初の秘密の悪に、その秘密を人に洩らすとって脅す、二番目の悪を重ねている。当然彼女の悪は深まっているのであり、しかもそれには虚像と実像、幻想と事実が奇妙に絡みついていて、一種えたいの知れない、何か根深いものを感じさせる。Roxanaは一体何を求めようとしているのだろうか。Tomの部屋から出る時のRoxanaの次のような様子は、よくこの悪の深化を物語っている。

She started again (toward the door), but halted again.

"Has you got any whisky?"

"Yes, a little."

"Fetch it!"

He ran to his room overhead and brought down a bottle which was two-thirds full. She tilted it up and took a drink. Her eyes sparkled with satisfaction and she tucked the bottle under her shawl, saying, "It's prime. I'll take it along." 9)

ところで、Tom の懇願を Roxana が聞き入れるということは、一応形の上だけであるが、二つの悪、Tomの悪とRoxana の悪の利害が一致したということである。Tomの一般的な、性格上の悪が、Roxana の暗い、社会的な悪と形の上で合体したということである。悪の歴史の探究を更に進めるためには、次にその合体の実質面を調べる必要がある。

V

RoxanaはTom を脅した日の夜、自分が住家としている町はずれの軒家、幽霊屋敷にTom を呼びつける。そしてそこで Tom に関する秘密をぶちまける。信じようとしないうTom も、この事実は文書にしてあって、さるところにあずけてある— Roxana は嘘をつく—といわれ、又嘘だといいはれば、Judge Driscollのところにその証拠書類をもって告げに行くといわれると、どうしようもない。結局Tomは月々養父から貰っている50ドルの半分をRoxanaに与える約束をさせられ、借金が 300ドルあって、その返済に困り、St. Louisにいと見せかけ、変装して、近所で盗みを働いたこともあると告白までさせられる。Roxanaはこの盗みを是認し、さすがにTomはことわるが、その援助も申しでる。

ここでTomの悪とRoxanaの悪は実質的に合体する。Tom は Roxanaの秘密の悪を受け入れ、RoxanaもTomの性格的な悪を認める。つまりusurpation というRoxana の秘密の悪に自らの意志をもったその実体が入り込み、それぞれがお互いを牽制したり、利用したり、敬遠したりしながら一つの目的に献身するという、悪のdramaの新しい展開が始まるわけである。

先ず新しい事態に自己を調整しなければならないTomの苦しみがある。Roxana から秘密を告げられ、家に帰ったTomは

Every now and then, after Tom went to bed, he had sudden wakings out of his sleep, and his first thought was, "Oh, joy, it was all a dream!" Then he laid himself heavily down again, with a groan and the muttered words, "A nigger! I am a nigger! Oh, I wish I was dead!"

He woke at dawn with one more repetition of this horror, and then he resolved to meddle no more with that treacherous sleep. He began to think. Sufficiently bitter thinkings they were. They wandered along something after this fashion:

"Why were niggers and whites made? What crime did the uncreated first nigger commit that the curse of birth was decreed for him? And why is this awful difference made between white and black? ...How hard the nigger's fate seems, this morning! — yet until last night such a thought never entered my head." 10)

Tomのこの苦しみは、悪の物語の出発点となった Roxana のあの苦しみと呼応する。Roxanaも子供と一緒に身投げして、死にたいと思ったし、どうしてniggerの子供だけが苦しまねばならないのかと思った。それと同質の苦しみがここに繰り返されて、しかも誰一人答えることも出来ないような、根本的な問いかけの形で呻くように提出されると、苦しみはますます尖鋭化し、確実なものになってくる。

If he met friend, he found that the habit of a lifetime had in some mysterious way vanished—his arm hung limp, instead of involuntarily extending the hand for a shake. It was the “nigger” in him asserting its humility, and he blushed and was abashed. And the “nigger” in him was surprised when the white friend put out his hand for a shake with him. He found the “nigger” in him involuntarily giving the road, on the sidewalk, to the white rowdy and loafer. 11)

この the“nigger” in himのもつ reality の何という強さであろう。nigger が虚構の image であるだけに、なおさらそれは何の障害物もなく、猛然と読者に迫ってくる。

niggerであることの苦しみ！ここでこの悪の物語の基調に、ある変化が起っていることに我々は気付く。悪の物語の起点となったRoxanaのusurpation は、果して悪なのだろうか。悪はむしろこのような苦しみを与え、そのような行為に走らせた者の側にあるのではないか。いや少なくとも、そちらの側にもあるのではないか。こう考えると、Roxana のあの暗い喜び、子供を通じて白人に復讐するという根深い、暗い情熱がはっきりと理解できる。結局ここにたどっている悪の歴史は、単にRoxanaやTom 個人の悪の歴史ではなく、社会或いは制度と深く結びつけられた悪の歴史であることが分かる。

Tomは非常なショックから人間が変わったようにも見えたが、しかしやがてそれも収まり、大体においてもと通りになる。つまり一方で養父の信用を失うのを恐れながらも、gamblingの味も忘れられないという生活である。RoxanaのTomに対する態度は先ず

He and his mother learned to like each other fairly well. She couldn't love him, as yet, because there “warn't nothing to him,” as she expressed it, but her nature needed something or somebody to rule over, and he was better than nothing. Her strong character and aggressive and commanding ways compelled Tom's admiration in spite of the fact that he got more illustrations of them than he needed for his comfort. 12)

Tom は、St.Louis からやって来てDawson's Landing のある家に下宿した、イタリア人の双生児の一人、Luigi Capello といざこざを起す。貴族と自称するその男を公衆の面前でからかい、Tom はその男から蹴とばされる。しかもTom はその侮辱を血闘でなく、裁

判沙汰にして、5ドルの罰金をせしめてケリをつける。養父—1850年に判事の職を去り、悠々自適の生活を送っている—はそれを聞いて驚き、あきれ、即刻血闘を申し込むようにTomに強要する。Tomは拒絶する。つまり家門の名誉よりは、恐怖心の方に従ったわけである。しかしそれには遺産相続の遺言状の破棄という悲しい事柄が伴っていた。Tomは非常に悲しむが、前にも遺言状は書き直して貰った事があったので、今度も必ずそうして貰おう、先ず盗みを止め、酒もgamblingも止めなければいけないと決意する。しかし遺言状は別の理由で、又もや作成される。家名のためにTomの代わりを買って出たJudge Driscollが、血闘に出かける直前に、万一の事をおもんばかり、一大慈悲心を發揮してTomのために遺言状を作成するのである。Tomはその事実を部屋に忍び込んで確かめ、欣喜雀躍し、今度こそ心を入れかえることを心に誓う。

しかし差し迫って債権者をどうあしろうかで途方にくれて、幽霊屋敷にRoxanaを尋ねる。このあたりの、それ相当にお互いの性格なり、弱点なりを見抜いている二人の、丁丁発止のやりとりは興味深いものがあるが、結局RoxanaはSt. Louisで盗品を小だしに売りさばいて、Judge Driscollが死ぬまでの数カ月間—養父はTomの希望にもかかわらず、血闘で殺されるどころか、怪俄一つしなかった—債権者に利子だけでも払うように忠告する。この場面での、悪に関係のある部分を挙げると、先ずTomのcowardiceについてのRoxanaの言葉は

“En you refuse’ to fight a man dat kicked you, ’stid o’ jumpin’ at de chance ! En you ain’t got no mo’ feelin’ den to come en tell me, dat fetched sich a po’ low-down ornery rabbit into de worl’ ! Pah ! it makes me sick ! It’s de nigger in you, dat’s what it is. Thirty-one parts o’ you is white, en on’y one part nigger, en dat po’ little one part is yo’ soul. ’Tain’t wuth savin’; ’tain’t wuth totin’ out on a shovel en throwin’ in de gutter. You has disgraced yo’ birth. What would yo’ pa think o’ you ? It’s enough to make him turn in his grave.” 13)

顔も知らない実父のことを持ちだされて、Tomの憎悪は燃え上がる。

The last three sentences stung Tom into a fury, and he said to himself that if his father were only alive and in reach of assassination his mother would soon find that he had a very clear notion of the size of his indebtedness to that man, and was willing to pay it up in full, and would do it too, even at risk of his life; but he kept his thought to himself; that was safest in his mother’s present state. 14)

St. Louisに出かけゆくまでのTomのとるべき態度についてRoxanaはいう。

“You got to go mighty keerful now, I tell you! En here’s what you got to do. He didn’t git killed, en if you gives him de least reason, he’ll bust de will ag’in, en dat’s de las’ time, now you hear me! So— you’s got to show him what you kin do in de nex’ few days. You’s got to be pison good, en let him see it; you got to do everything dat’ll make him b’lieve in you, en you got to sweeten aroun’ old Aunt Pratt, too—she’s pow’ful strong wid de Jedge, en de bes’ frien’ you got…” 15)

TomはSt. Louisへ出かけるが、その途中船の中で肝心の盗品を盗まれて、困ってしまう。Tomは出かける前、自分が血闘をしなかったのは、相手、Count Luigiがかって殺人の罪を犯した人物であって、the field of honor たる血闘の場をそれで穢したくなかったからだといって、伯父の信用をすっかりとり戻していた。それが又、すっかり駄目になろうとしている。自分の忠告に忠実に従うTomに少しずつ愛情も感じていたRoxanaは、母親としての真情を示すが、それに対するTomの反応は複雑である。

When Roxana arrived, she found her son in such despair and misery that her heart was touched and her motherhood rose up strong in her. He was ruined past hope, now; his destruction would be immediate and sure, and he would be an outcast and friendless. That was reason enough for a mother to love a child; so she loved him, and told him so. It made him wince, secretly—for she was a “nigger.” That he was one himself was far from reconciling him to that despised race. 16)

niggerであることの、何という悪、或いは罪の深さであろう。一度足をとられたら、ずるずると落ちこんでゆく底なし沼のような深さである。Roxanaは母親の心の中は白人でもniggerでも同じだといって、進んで奴隷に身売りをして、息子の急場をしのごうと提案する。Tomは感謝の涙を流して、それにすがりつく。600ドルでRoxanaは、それにくらべたら死さえa poor and common place sacrificeである奴隷女になる。Tomのgamblingによる借金約300ドルで、残りはとっておき、TomがRoxanaに毎月与える分の25ドルを積みたてて、一年後に買い戻すという約束であった。約束はもう一つあって、北の方(up de country)のplantationに売るということであったが、Tomはそれを裏切って、Arkansas cotton-planter (down the river)に売り渡してしまう。積極的にそうするつもりはなかったのだが、わざわざ北の方に買い手を探しに行ったり、面倒臭い事務的な手続きなどをする手間が省けたからであった。

このあたりから、悪の物語はその速度と密度の濃さを、加速度的に増してゆく。一体Tomはどこまで墮ちるのだろうか。この世の地獄として、この物語の一つの極限状況として、

悪の象徴のように折にふれ時にふれて語られてきたdown the riverに、今Roxanaは投げ込まれて、一体どうなるのだろうか。

Roxanaは、しかしその途中の船上で、河の流れの様子から自分がdown the riverに売られたのを知り、10日ぐらいでそこを逃げ出して帰ってくる。農園主の妻に苦しめられ、その意をうけた白人の監督にいじめられ、いや、自分を慕う10才位の女の子が、その監督から箒の柄のような棒で、弱った蜘蛛のように叩きのめされるのには何としても我慢できず、その棒を握みとって、逆に叩きのめし、逃げ出したのだった。勿論死を覚悟していたのが、結局再びTomの前に現われることになった。雨のひどく降る夜、変装して St. Louis のTomの下宿に現われたRoxanaは、しどろもどろで弁解するTomに向かって、泣きながらいう。

Roxy began to cry softly, and presently words began to find their way out between her sobs. They were uttered lamentingly, rather than angrily:

"Sell a pusson down de river—down de river! —for de bes! I wouldn't treat a dog so! I is all broke down en wore out, now, en so I reckon it ain't in me to storm aroun' no mo', like I used to when I 'uz trompled on en 'bused. I don't know—but maybe it's so. Leastway, I's suffered so much dat mourn-in' seems to come mo' handy to me now den stormin'." 17)

Roxanaの胸は切なく、怒る気力もない。しかしその夜の会合は、一方で逃亡奴隷のRoxanaを追う planter の手も既にTomの所まで延びてきていて、緊張にみちている。Roxanaを買主に渡すか、金の工面をするか、どちらも出来そうもないと思惑するTomの顔は苦悩にみち、醜くゆがんでいる。RoxanaはTomを徹底的に追い詰め、そして軽蔑する。

"What could you do? You could be Judas to yo' own mother to save yo' wuthless hide! Would anybody b'lieve it? No—a dog couldn't! You is de low-downest orneriest hound dat was ever pup'd into dis worl'—en I's 'sponsible for it!"—and she spat on him. 18)

夢を託した息子に唾を吐きかけねばならない母親の胸中は如何ばかりであろう——正しく、悪が身もだえしている姿である。

Roxanaは最後に、TomにJudge Driscollの所に行って、自分を買戻す金を工面してくるよう断固として命ずる。観念したTomはRoxanaの命令に従うが、金を無心する—それは秘密がばれて、我が身が破滅することを意味する—のだけでなく、金を盗もうと決心する。

Tomは夜おそく Dawson's Landing の家に帰り、自分の部屋で若い、黒人の女に変装

し、万一のためにIndian knife—Count Luigi からTom が盗み、金にかえられずに隠していた、いわく付きの短剣—を手にして、伯父の部屋に忍びこむ。丁度金の計算をしかけたまま、伯父は疲れて、ソファ—の上に眠っていた。Tom は枕もとの小机の上の紙幣に手をのぼすが、誤ってナイフの鞘を床に落す。とたんに体をつかまれて、無中になってTomは伯父を刺し殺す。何枚かの血のついた紙幣を驚づかみにし、一回は拾い上げたナイフを後に残して—Count Luigi を犯人にしたてようという魂胆であった—Tom は逃走する。これが悪の物語のクライマックスである。そしてこれはRoxanaの悪とTom の悪の合体が、一つの必然として予定していた事なのである。

VI

犯人は選挙のことから丁度Judge Driscollに血闘を申し込んでいて、しかも現場に居合せた一散歩の途中で悲鳴を聞いて、一番最初に駆けつけた—Count Luigi兄弟だと見做され、裁判が始まるが、弁護士であり、市長となっている Pudd'nhead Wilson の法廷での大活躍により、Tomが真犯人であることが判明する。決めてはIndian knife についていたTomの指紋であり、同時にTomがValet de Chambre, negro and slaveであるという恐るべき事実—Roxanaは昔、二人の子供の指紋を自分の指紋と一緒に、定期的に Wilson にとって貰っていた—が公表された。物語の結末として先ずRoxanaは、

Roxy's heart was broken. The young fellow upon whom she had inflicted twenty-three years of slavery continued the false heir's pension of thirty-five dollars a month to her, but her hurts were too deep for money to heal; the spirit in her eye was quenched, her martial bearing departed with it, and the voice of her laughter ceased in the land. In her church and its affairs she found her only solace. 19)

つまり悪の歴史の終結と共に、Roxanaの「人間」は死んでしまう。次に被害者の Chambersこと Thomas Driscoll は、読み書きも出来ず、話し方も下品で、歩きぶり、身ぶり、笑い方すべて野卑で、奴隷のそれであった。

Money and fine clothes could not mend these defects or cover them up; they only made them the more glaring and the more pathetic. The poor fellow could not endure the terrors of the white man's parlor, and felt at home and at peace nowhere but in the kitchen. The family pew was a misery to him, yet he could nevermore enter into the solacing refuge of the "nigger gallery"—that was closed to him for good and all. 20)

最後にTomは一応終身刑が確定するが、8年前破産して死んだ Percy Driscoll の債権者たちが、60%の債務しか済んでいないと言って、異議を唱え、結局

Everybody granted that if "Tom" were white and free it would be unquestionably right to punish him—it would be no loss to anybody; but to shut up a valuable slave for life—that was quite another matter.

As soon as the Governor understood the case, he pardoned Tom at once, and the creditors sold him down the river. 21)

VII

Down the river によって幕を明けられた悪の歴史は、今ここに又 down the river によって幕をおろされた。Down the river の烈しい、一途な拒否に始まった物語が、それへの全面的な屈服によって終わっている。前も後ろも down the river にかっしりと挟み込まれたこの物語の世界には、逃げ口は全然ない。もともと悪の物語にそのような逃げ口を求めるのが無理な話であろうが、それにしてもこの物語の八方塞がりの世界には、ただそう言ってすましておれない何かがある。それは余りにも暗く、重く、そして深い世界である。

なるほど明るい面もないではない。例えば血闘に出かける直前に、Tomに対して遺産相続を決意するJudge Driscollの寛大さ、Pudd'nhead WilsonやCount Luigiの利害や打算でなく、相手の名誉や立場を重んずる態度、down the riverで、鬼のような白人監督からかよわい少女を救ったRoxanaの義侠心、或いはそのchambermaid時代の楽しい生活などである。しかしこれらはこの物語の世界の暗さを打ち消すほど明るくはない。それはごく片隅の、ともすれば忘れられがちな明るさである。それにくらべ、例えばTomの性格的な暗さはどうであろう。Tomは訴訟の相手としてすら、Wilsonから軽蔑され、又Wilsonが法廷に持ち込んだ指紋入れを見て、自分の最後が迫っているのも知らずに、あれは裁判に勝ち目のないWilsonが、せめて自分の収集品でもロハで宣伝しようとしているのだと友達に言うTomの俗悪さには、度しがたいものがある。しかもそれが単にniggerとしての俗悪さ、暗さでなく、深く人間性一般に根ざしたものであるが故に、尚更やり切れない。たとえばTomが血闘をこわがって、弊履のごとく名誉を捨てざる行為には、人間的な根拠が十分にある。そこでは名誉にしがみつく世間の方も、Tomと同じように批判されているのだ。利己的で冷血漢で、飲酒癖と賭博癖の持主で、あらゆる場合に自分の利益だけしか考えられないTom——人間は持って生れた性質はどうすることもできないのだ。それに加えて、環境の重圧がある。Tomは甘やかされて育ったのだ。MasterでありdeityであったTomに対し、生みの親であるRoxanaが親としての厳しさを発揮できなかったのは当然であるし、土地ブローカーのParcy Driscollには子供より金の方が大切という悲惨な現実があったし、又養父Judge Driscollにはそれまで子宝に恵まれなかったという欠点があった。実際Judge Driscollは一人前の男になるべく、厳しくしつけないで、甘やかしたのは

自分の責任であり、死んだ弟 (Percy Driscoll) に済まないと言っている。Tomは環境、或いは“training”の犠牲者でもあるのだ。この暗い考えは、身分は白人になったが、中身は依然として奴隷のそれであるChambersことThomas Driscollに完全に表われている。“Chambers”の白人社会での不様な様子には、何ともやりきれない、重く暗いものがある。

暗さはそれだけではない。物語の最後の、よってたかって奴隷のTomを食いものにする、白人債権者たちのあくどいやり方はどうであろう。州知事まで一枚加わって悪の上塗りをするその非人間なやり方を、一体何と形容したらいいのだろう。これこそ正にdown the riverの世界である。

October 12, the Discovery. It was wonderful to find America, but it would have been more wonderful to miss it.

・—Pudd'nhead Wilson's Calender. 22)

ほんとにこのような精神的害毒をもたらす奴隷制度、その奴隷制度を生みだしたアメリカなど、発見されなければよかったのだ。

結局Mark Twainは、単に奴隷制度という「現実」の問題を取り上げているのではなく、それが人間社会に、人間の精神の現実にとどのような影響を与えるかを問題にしているのである。「Pudd'nhead Wilsonにおける悪」とは従って、奴隷制度そのものの悪というより、それが人間社会に、人間—奴隷も勿論人間である—の精神の現実にもたらす悪、人間そのものがもっている恐るべき悪のことである。Mark Twainにとって現実とはこのような人間の精神の現実であり、それはMark Twainの内なる現実でもある。Mark Twainの内なる奴隷制度、その矛盾が内側からMark Twainを突き上げ、その圧力に押されてMark TwainはPudd'nhead Wilsonを書いた。しかもMark Twainはよくその任に堪えた。けれど精神の現実には、単に人間的な誠実さ、真剣さだけでは不十分であり、芸術上の方法に賭けられる作家の才能をまっぴらして始めて完全に処理できるからである。黒白混血のRoxanaとTomの創造、及びusurpationというプロットの着想、Mark Twainの偉大さは実にこの点にある。

註 引用はすべて

Mark Twain, Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins (New York : Harper & Row)

- | | | |
|-------------|----------------|-----------|
| 1) p.16 | 9) p.69 | 17) p.151 |
| 2) pp.11—12 | 10) p.76 | 18) p.161 |
| 3) p.18 | 11) pp.77—78 | 19) p.202 |
| 4) p.28 | 12) pp.79—80 | 20) p.202 |
| 5) p.33 | 13) p.123 | 21) p.203 |
| 6) p.34 | 14) pp.123—124 | 22) p.201 |
| 7) p.64 | 15) p.127 | |
| 8) p.67 | 16) p.142 | |